

防災問題における資料解析研究 (40)

Information Analysis in the Field of Natural Disaster Science (40)

林 春男・矢守克也・牧 紀男・鈴木進吾

Haruo HAYASHI, Katsuya YAMORI, Norio MAKI, and Shingo SUZUKI

Synopsis

The objectives of this paper are to summarize the research activities of Research Center for Disaster Reduction Systems, DPRI. They are systematically organized by not only our staff members but also many researchers and practitioners who do voluntary work in some workshops and symposia. Open symposia were held monthly with large audience. The 18th Seminar for Regional Disaster Prevention Plan was held focusing on the Internet for disaster management. The 13th Workshop on Comparative Disaster Studies was held to discuss the two big research projects on national catastrophe and urban resilience. We are also upgrading and expanding the database SAIGAI and historical disaster database.

キーワード: データベース, 比較防災学, セミナー, ワークショップ, オープンラボ

Keywords: camera-ready, PDF file, two-column text, punctuality

1. 総合防災セミナー

巨大災害研究センターでは過去10年以上にわたって、当センターの教員・研究員および客員教員や非常勤講師等によるオープンセミナーを開催してきた。2010年度からは本セミナーを発展させ、防災研究所社会防災研究部門との共催で総合防災セミナーとして開催している。

2012年度の開催日と講演者およびタイトルは以下のとおりであり、総合防災グループをはじめとして防災研究所の関係教官、学生、さらに特別講義として公開している情報学研究科の大学院生、一般の聴講希望者が参加し、毎回活発な議論が重ねられた。

・ 第1回 (2012年4月27日)

「津波でんでんこの四つの意味」
巨大災害研究センター 矢守克也 教授
「河川を通じた放射性核種流出について」
社会防災研究部門 山敷庸亮 准教授
「復興移転事業に係る幾つかの課題」
社会防災研究部門 安田成夫 特定教授

・ 第2回 (2012年6月1日)

「建物の層間変位計測に基づくリアルタイム損傷モニタリングシステム」
鹿島建設株式会社・技術研究所 畑田 朋彦 上席
研究員 (巨大災害研究センター・客員准教授)

・ 第3回 (2012年7月6日)

「災害ボランティアが拓く可能性: 東日本大震災の事例」
大阪大学大学院人間科学研究科 渥美公秀 教授

・ 第4回 (2012年10月5日)

「災害とボランティア～東日本大震災における課題と今後の巨大地震に向けた提言」
特定非営利活動法人レスキューストックヤード 栗田暢之 代表理事

・ 第5回 (2013年1月18日)

東日本大震災後の日本の防災を考える (産官学共同研究部門キックオフ講演会)

2. 第18回地域防災計画実務者セミナー

「地域防災計画実務者セミナー」は、自治体の防災担当職員を主たる対象者として都市防災・地域防災についての理解を深める一助として、阪神・淡路大震災が起こった1995年8月に3日間にわたって第1回セミナーを開催して以来、毎年開催を継続し、今回で第18回目を迎えている。本セミナーでは、自然災害の外力の特性を理解すること、災害対策を危機管理の立場から実施すること、およびその実例を紹介することを目的として、毎年講演題目を組み立てている。

本年度は東日本大震災においてもその発生直後から各方面における災害対応で活用されたインターネットに焦点をあて、今その技術を利用して高度化されつつある災害対応の新しい形について考えた。初日にITを利用した新しい災害対応についての最新の研究成果を、2日目は東日本大震災での経験と、“ビッグデータ”、“GIS”、“クラウド”を活用して災害対応の新しい形を切り拓く取り組みを紹介した。3日目には、受講者に実際にウェブGISを操作していただき、災害対応の新しい形を体感していただく、ハンズオンセミナーを開催した。

京都大学百周年時計台記念館2F国際交流ホールに於いて3日間にわたって以下のプログラムで開催した。セミナー参加者の関心も高く、初日48名、2日目70名、最終日42名の参加を得た。

■第1日目（平成24年10月1日）プログラム

13:00 挨拶（京都大学防災研究所 巨大災害研究センター 教授 林 春男）

13:05 講義1（～14:20）

「災害経験の結集による災害想定システム」（京都大学防災研究所 巨大災害研究センター 助教 鈴木進吾）

14:30 講義2（～15:45）

「効果的な情報連携による状況認識システム」（新潟大学 災害復興科学研究所 助教 井ノ口宗成）

16:00 講義3（～17:15）

「現場支援で生まれた生活再建支援システム」（新潟大学 危機管理室 教授 田村圭子）

17:15 終了

■第2日目（平成24年10月2日）プログラム

●東日本大震災で見てきたITを活用した災害対応
9:30（～10:05）

「Yahoo!JAPAN 東日本大震災からの考察」（ヤフー株式会社メディアカンパニーターゲットングメディア

アユニット ユニット長 高田正行）

10:05（～10:40）

「災害とインターネット 東日本大震災の教訓」（グーグル株式会社 シニアエンジニアリングマネージャー 賀沢秀人）

10:50（～11:25）

「東日本大震災における行政機関での情報分析」（経済産業省 CIO補佐官／東京大学公共政策大学院非常勤講師 平本健二）

11:25（～12:00）

「IPA災害対応プロジェクトチームの報告～強くしなやかな社会に貢献するITを探る～」（独立行政法人情報処理推進機構 技術本部 国際標準推進センター センター長 田代秀一、研究員 岡田良太郎）

12:00（～13:10） 昼食

●“ビッグデータ”による災害対応の新しい形

13:10（～13:40）

「通行可能な道路を把握する」（特定非営利活動法人 ITS Japan 専務理事 天野 肇）

13:40（～14:10）

「緊急物資輸配送を支える物流Netシステム」（一般社団法人全国物流ネットワーク協会 常務理事 松永正大）

●“GIS”による災害対応の新しい形

14:20（～14:50）

「被災自治体におけるGIS活用」（福島県相馬市 企画部情報政策課 情報システム係 係長 只野聡一）

14:50（～15:20）

「WebEOCによる新しい災害対策本部」（奈良県橿原市 危機管理室危機管理課 係長 山本知巳）

●“クラウド”による災害対応の新しい形

15:30（～16:00）

「しなやかな社会を作る危機管理系システムとクラウド」（NTTセキュアプラットフォーム研究所 前田裕二、東田光裕）

16:00（～16:30）

「日本で広がる米国発のシェイクアウト訓練とは」（ShakeOut提唱会議事務局 事務局長 澤野次郎）

16:40（～17:30） パネルディスカッション

コーディネーター：京都大学防災研究所 林 春男
パネリスト：話題提供者全員

17:30 終了

■3日目（平成24年10月3日）プログラム

9:30（～11:55） ハンズオンセミナー

「ウェブGISを使った新しい情報共有と状況認識の統一」（ESRIジャパン株式会社 コンサルティング

サービスグループ 穂本勝彦)
11:55 (～12:00)
閉会の挨拶 (京都大学防災研究所 巨大災害研究
センター 教授 林 春男)
12:00 終了

日時：平成24年7月27日(金)13:30～16:30
場所：堂島リバーフォーラム
参加者数：32名

「地方自治体が「やさしい日本語」で災害情報を伝えようとする理由 1.17, 10.23, 3.11—外国人住民は災害下でどう情報を得ていたか」
佐藤 和之(弘前大学 人文学部 教授)

3. 災害対応研究会

3.1 概要

平成10年4月17日から、災害発生後の災害過程について体系的な理解を確立することを目的とし、毎年4回、セミナーを開催してきた。話題提供者は各回2名で、出席者は、毎回、当センターの関係教員をはじめ、行政の防災関係者、研究機関の教員、医療関係者、教育関係者、防災関係企業、NPO、マスコミ関係者等と多岐にわたり、活発な議論を重ねている。平成24年度の講演のキーワードは、「金芳外城雄ワールドを訪ねて」、「やさしい日本語をまなぶ」、「震災時の医学を考える」、「国難と都市災害：来るべき国難にどのように備えるべきか」であった。開催日時と講演者名及びタイトルは、以下の通りである。ただし、平成25年1月には、神戸国際会議場で行われた神戸市主催の第6回「災害対策セミナー in 神戸」に参加し、比較防災学ワークショップ(本章「4. 比較防災学ワークショップ」を参照)と共催にて、公開シンポジウム形式で研究会を実施した。

3.2 開催日程

・第1回<金芳外城雄ワールドを訪ねて>
日時：平成24年4月27日(金)13:30～16:30
場所：堂島リバーフォーラム
参加者数：29名

「支え合う知恵15」
金芳 外城雄(神戸学院大学学際教育機構 防災・社会貢献ユニット 教授)
「知恵の共有」(全参加者との意見交換)
「大学連携事業」
若菜 稔(神戸学院大学社会連携部 グループ長)
田中 綾子(ポーアイ4大学連携推進センター
コーディネーター)

神戸学院大学 金芳外城雄先生に、阪神淡路大震災からの復興に向けた神戸市時代のご活動と、神戸学院大学に移られてからの震災体験をまとめ語り継ぐ活動の両方について語っていただいた。

・第2回<やさしい日本語をまなぶ>

「やさしい日本語」とは外国人のための防災を推進する方法として20年近く研究されてきた試みである。その中心人物が弘前大学人文学部の佐藤和之教授である。彼が各地で実際に提供している「やさしい日本語」講座の内容に即して、災害対応研究会で講演いただいた。わかりやすい防災情報の提供は、外国人のためだけでなく、高齢少子化が進む日本にとって不可欠なテーマであることを再認識した。

・第3回<震災時の医学を考える>
日時：平成24年10月26日(金)13:30～16:30
場所：堂島リバーフォーラム
参加者数：24名

「阪神淡路大震災 被災地の端っこ・兵庫県立淡路病院からの報告」
水谷 和郎(医療法人社団顕鐘会 神戸百年記念病院
内科医長)
「徳島県での死体検案、遺族対応に関する取り組みについて」
西村 明儒(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 感覚運動系病態医学講座法医学分野 教授・環境防災研究センター 副センター長)

阪神淡路大震災と東日本大震災という2つの震災における広義の医療活動について比較検討した。

・第4回「災害対応研究会」公開シンポジウム
比較防災学ワークショップとの共催にて開催した。
(本章「4.比較防災学ワークショップ」を参照)

4. 第13回比較防災学ワークショップ —みんなで防災の知恵を共有しよう— 13th Workshop for “Comparative Study on Urban Mega Disaster Management”

4.1 開催趣旨

自然災害は、自然現象であり、同時に社会現象でもある。阪神・淡路大震災をきっかけとして、「災害に

強い社会」を作るためには社会現象としての災害についての研究の必要性が明らかになった。

阪神・淡路大震災をはじめ、米国・ノースリッジ、台湾・集集、トルコ・マルマラ地震災害による都市地震災害、2001年の911WTCテロ災害や国内での有珠山、三宅島、雲仙・普賢岳などの噴火災害、2004年9月5日に発生した紀伊半島南東沖地震、10月23日に発生した新潟県中越地震、12月26日に発生したスマトラ島沖地震・津波災害、また、風水害については1998年と1999年の全国的な氾濫災害と土砂災害、さらに、2004年に日本各地を襲った風水害や2008、2009年には全国的にゲリラ豪雨災害が多発した。2011年に発生した東日本大震災は改めて防災・減災に関する社会的関心を高めた。これらに共通することは被害様相が国や地域によって大きく異なる特徴をもっているということである。

このワークショップは地域によって異なる様相を示す災害について、さまざまな角度から比較・検討する場を作ろうとする試みである。地域、文化、時間、季節、立場、年齢、男女等の比較を通じて、生活と防災に関する新しい発見が生まれることが期待されている。

2001年から始まったこのワークショップは、当時進行していた都市地震災害に関する日米共同研究の成果を共有する場として、特に災害の社会的側面に焦点を当てた研究に関するワークショップとしてスタートした。第1回比較防災学ワークショップは神戸国際展示場で、2001年1月18日・19日に、第2回は、神戸国際会議場で2002年2月14日・15日、第3回は、神戸国際展示場で2003年1月30日・31日に開催した。

都市地震災害に関する日米共同研究の終了後も、比較防災学の推進の必要性は何ら減ずる訳ではなく、むしろこうした機会を継続する必要性は一層高まったと考え、以下に述べるようにこのワークショップの性格を明確化した上で、その後も毎年1月、または2月に神戸で開催することを決定した。

- [1]従来のワークショップと違い、講演を中心とするのではなく、広く会場から意見の提出を求め、それを集約するやり方で会場運営し、全参加者の能力向上を目指すユニークな試みである。
- [2]比較防災学に関するワークショップは世界で初めての開催であり、21世紀の初めにそれを開催し、継続するインパクトは大きい。
- [3]会場が毎年、同じ場所に固定されており、継続性の高いワークショップである。
- [4]メモリアル・カンファレンス・イン神戸（現在、「災害メモリアル神戸」として継続中）とセットで、震災記念事業のひとつとして位置づけられる。
- [5]研究者のみならず、行政の防災担当者、災害情報

分野の民間企業の社員などが、これまでになかったオープンな雰囲気活発な意見交換ができる。

以上の方針にもとづいて、第4回を神戸国際展示場で2004年1月29日・30日、第5回を神戸国際展示場で2005年1月20日・21日、第6回を神戸国際展示場で2006年1月17日・18日、第7回を神戸国際会議場で2007年1月18日・19日、第8回を神戸国際会議場で2008年1月16日、第9回を神戸国際会議場で2009年1月16日、第10回を神戸国際会議場で2010年1月19日・20日、第11回を神戸国際会議場で2011年1月19日・20日、第12回を神戸国際会議場で2012年1月20日・21日に開催した。今年度も第13回として、また第10回よりは、災害対応研究会（本章「3.災害対応研究会」参照のこと）との共催で、神戸国際会議場にて2013年1月21日・22日に開催した。

4.2 開催日時

2013年1月21日(月)14:00～16:30、1月22日(火)10:00～16:00

4.3 開催場所

神戸国際会議場5階501会議室

4.4 プログラム

「国難と都市災害：来るべき国難にどのように備えるべきか」

<2013年1月21日>

「何をめざすか」について研究代表者が語る」

14:00～14:10

開会挨拶

関西大学社会安全研究センター
センター長・教授 河田恵昭

14:10～15:10

基調講演 1

『「国難」となる最悪の被災シナリオと減災対策』研究代表者

関西大学社会安全研究センター
センター長・教授 河田恵昭

15:10～16:10

基調講演 2

『都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト「3.都市災害における災害対応能力の向上方策に関する調査・研究」』研究代表者

京都大学防災研究所 教授 林 春男

16:10～16:30

質疑応答

<2013年1月22日>

「研究の最前線をさぐる」

10:00～10:40

「東海・東南海・南海地震と地域の持続性」

京都大学防災研究所 准教授 牧 紀男

10:40～11:20

「大都市巨大災害の経済被害と復興対策」

関西大学社会安全学部・大学院社会安全研究科

准教授 永松伸吾

11:20～12:00

「新しい南海トラフ巨大地震・津波の想定にみる国難」

京都大学防災研究所 助教 鈴木進吾

12:00～13:00

(昼食休憩)

13:00～13:40

「防災リテラシーハブが目指すもの」

兵庫県立大学環境人間学部 准教授 木村玲欧

13:40～14:20

「今後の防災対策を考える上での重要なポイントと効果的な防災計画やアクションプランの作成と実施法について」

東京大学生産技術研究所 教授 目黒公郎

14:20～15:00

「被災者台帳を用いた総合的な生活再建支援」

新潟大学 危機管理室 教授 田村圭子

15:00～16:00

パネルディスカッション

モデレーター：関西大学社会安全研究センター
センター長・教授 河田恵昭

パネリスト：話題提供者全員

閉会挨拶 京都大学防災研究所 教授 林 春男

4.5 研究成果

[1] 延べ212名が参加した。

[2] 今年度は期せずして、社会の防災力の向上を目的とした2つの総合的な視野に立つ5年間の大型研究がスタートした。一つは河田恵昭教授を研究代表者とする科学研究費補助金・基盤研究S『「国難」となる最悪の被災シナリオと減災対策』であり、もう一つは林春男教授を研究代表者とする文部科学省委託事業『都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト「3. 都市災害における災害対応能力の向上方策に関する調査・研究」』である。この2つの研究は相互に参考にするべきところが大きく、両者の連携はシナジー効果を持つと考えられる。そこで両研究の参画者による研究成果の紹介と、パネルディスカッションを行った。

[3] 研究成果の詳細をまとめた第13回比較防災学ワークショップProceedingsを刊行した。

5. 阿武山観測所オープンラボ

東日本大震災の発生をうけて、防災に対する人びとの関心が強まるなか、「アウトリーチ」への期待が高まっている。こうした動向を踏まえて、巨大災害研究センターでは、平成23年度から、阿武山観測所を舞台にこれまでにないユニークなアウトリーチ活動（「阿武山観測所オープンラボ」）を開始した。これは、巨大災害研究センターに所属する教員（矢守）が、平成22年度末から、同観測所にも兼務（ダブルアポイントメント）したことを、ひとつの契機としている。

「阿武山観測所オープンラボ」は、80年あまりの歴史と伝統をもつ現役の地震観測所を、サイエンス・ミュージアム（地震学に関する博物館）としても活用しようという試みで、同観測所長の飯尾能久教授、米田格技術職員、片尾浩准教授（地震予知研究センター）、および、平林英二氏（人と防災未来センター）を中心とするチームとの共同事業である。「オープンラボ」では、日本の地震研究の黎明期に活躍した歴史的な地震計から最新型の地震計まで、観測所に保存展示されている資産をフル活用し、地震学のイロハー地震学の最新成果と同時に直面する課題まで一をわかりやすく伝えている。

昨年度は、一昨年度スタートさせた「阿武山オープンラボ」と銘打った大型のイベントのほか、下記のとおり、観測所職員の努力によって通常の施設公開日も従来よりも回数を大幅に増やした。さらに、サイエンス・ミュージアムの運営そのものを広く社会に開かれたものとするために、観測所が主催する研修会を修了して認定を受けた一般のボランティア説明員（減災サイエンス・コミュニケーター＝「阿武山サポーター」）を養成する講座も開催した。一部のサポーターはすでに活動を開始し、現時点では、通常の施設公開日における講義や館内のガイドツアーのほとんどをサポーターが担っている。

以下、昨年度の主たる活動について列記する。

(1) オープンラボ（大規模なイベント）

■ 第1回（2012年6月2日～3日）「サポーター養成講座」

参加者数：85名

・1日目プログラム

10:00 受付開始

10:15 開講挨拶 「阿武山サイエンス・ミュージアム構想」について

矢守克也 巨大災害研究センター長

10:30 セミナー1 阿武山地震観測所の役割・機

能と歴史～地震観測の歴史と、阿武山の地震観測機器

飯尾能久 阿武山地震観測所長

11:30 ガイドツアー 歴代地震計・地震観測機器
保存展示室

米田 格 阿武山地震観測所 技術職員

12:10 昼食休憩（ドリンク・サービス） 要：昼
食持参

13:15 セミナー2 阿武山地震観測所の地域資
源・文化的魅力

岩堀卓弥 京都大学大学院（矢守研究室）

13:45 セミナー3 After1.17 & 3.11, 私たちはこ
れから何を学び、どう行動するべきか

地震学・減災学は今何が目指されているのでしょ
うか。そして私たち市民ひとり一人が学ぶことの必
要性や意義について考え合おう。

飯尾能久 & 矢守克也

14:30 休憩

14:45 ワークショップ

「私の可能性を活かしたサポーター活動、阿武山
でやりたいこと、できることを探そう。」

共働き、自分自身が輝く。そんな「地震・減災：
学びのミュージアム」を形成しよう。

城下英行 関西大学社会安全学部 助教

16:20 （おまけプログラム）観測所 施設案内ツ
アー

16:45 交流会（軽食サービス付き）

18:30 終了

・2日目プログラム

10:00 受付開始

10:30 セミナー4 満点計画と満点地震計につ
いて

世界最小最軽量の「満点地震計」の観測波形を使
って、満点計画に触れてみよう。

片尾 浩 地震予知研究センター 准教授 & 米
田 格

12:00 昼食休憩（ドリンク・サービス） 要：昼
食持参

13:15 セミナー5 市民減災アクション・プログ
ラム

今、ここで災害が発生したらどう行動するべきか。
備えはどのくらいできているだろう？考えを交換
して、「その時」への備えを深めよう。

協力：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センタ
ー

14:30 休憩

14:45 セミナー6 接遇研修（エマージェンシー
対応プログラム付き）

来館者に快適に過ごしていただく基礎テクニック
を身につけよう。そして非常時の案内からサポート
まで、究極のサービス・スキルを修得しよう。

杉左近美紀 元国際線客室乗務員

16:00 サポーター認定証発行、閉講挨拶

※随時：特別解説ツアー、オープンカフェ、プチ！
おみやげショップ

■阿武山オープンラボ第2回（2012年7月29日）「夏
休み企画」（図1参照）

参加者数：103名

10:30～12:30 & 14:00～16:00

大昔の超大型地震計を見学しよう！&ペットボト
ル地震計づくりに挑戦しよう

平林英二（人と防災未来センター）&人防チーム
&岩堀卓弥（京都大学大学院（矢守研究室））

※随時：特別解説ツアー、オープンカフェ、プチ！
おみやげショップ

■阿武山オープンラボ第3回（2012年10月20日～
21日）

参加者数：72名

・1日目プログラム

10:00 講座開始

10:10 接遇研修 担当：杉左近チーム

12:00 レクチャー&ガイドツアーのための質疑
応答（飯尾能久 阿武山地震観測所長）

12:30 休憩、および個人トレーニング

14:00 模擬「セミナー&ツアー」の実施（第1組）

15:30 休憩・（アンケート結果集計・審査集計）

16:00 評価結果発表（飯尾教授&米田格阿武山
地震観測所技術職員ほか）

17:00 交流会

・2日目プログラム

10:00 講座開始

10:10 模擬「セミナー&ツアーの実施（第2組）

11:10 振り返り・ツアー本番担当者選考、決定

12:00 休憩

13:20 「一般公開見学会」受付開始

14:00 「一般公開見学会」本番開始

15:30 振り返り、認定証発行、今後予定の確認

(2) 一般見学会（一般施設公開）

観測所職員の努力とサポーター制度の導入によ
って、従来よりも回数を大幅に増やし、月に1回のペ
ースで合計12回開催した。合計349名が参加した。

(3) 研修会，研究会

サイエンス・ミュージアム構想の一環として，また，観測所のアウトリーチ機能を強化するため，地域社会，教育関係組織（教育委員会など），防災関係機関（マスメディアなど），各種の学会，小中高등학교等が主催する研修会や研究会を合計20回開催した．合計399名が参加した．

これらの取り組みの結果，昨年度，阿武山観測所を訪ねいただいた方は，合計1678名に上った．

6. 自然災害データベース

6.1 データベース“SAIGAI”

巨大災害研究センターでは，その前身である旧防災科学資料センターの設立当初より，国内における災害関連資料の収集・解析を行い，これらの資料をもとに比較災害研究，防災・減災などに関する研究を実施してきている．これに基づき，昭和57年度よりデータベース“SAIGAICS”が構築され，旧防災科学資料センター所蔵の論文ならびに災害関連出版物の書誌情報が登録されてきた．この“SAIGAICS”は，平成元年度に科学研究費（研究成果公開促進費）の補助を受けて全国的な文献資料情報データベース“SAIGAI”として拡充された．現在，本センターを中核として，全国各地資料センター（北海道大学・東北大学・埼玉大学・名古屋大学・九州大学）の協力のもとでデータの追加作業が継続されている．

昭和58年に文献検索に資するため，科学研究費・特別研究「自然災害」の補助を受けて「自然災害科学キーワード用語集」が刊行された．平成2年に検索サービスは，京都大学大型計算機センターのデータベースへ移行し，大学間ネットワーク（N1システム）に加入している大学であれば，日本語端末を用いて資料の検索が可能になった．平成6年には，キーワードの追加・体系化を行った改訂版が「自然災害科学キーワード用語・体系図集」が刊行された．平成10

年，平成20年，平成24年に，データベースの処理能力増強を目的とした計算機システムの更新を行った．検索システムはWWW上に構築され，各ユーザーはパーソナル・コンピュータなどのwebブラウザから自由にアクセスが可能となっている．平成23年度には新たに約1万件の資料を登録し，登録されているデータは，平成25年3月現在で12万5830件に達した．なお，データベース“SAIGAI”はURL，<http://maple.dpri.kyoto-u.ac.jp/saigai/>でアクセス可能である．

6.2 災害史料データベース

巨大災害研究センターでは，昭和59年度より歴史資料に現れる災害及びその対応等の関連記事をデータベース化するプロジェクトを実施している．

その成果として蓄積されてきた史料とその現代語訳データは「災害史料データベース」として，公開している．平成16年に，データベースをウェブ上で検索可能にし，表示できるようにする公開用プラットフォームが科学研究費補助金の交付を受けて作成され，データベースにはURL，<http://maple.dpri.kyoto-u.ac.jp/saigaishiryo/>でアクセス可能となっている．災害史料データベースに登録されている史料データは，平成24年3月現在で，西暦599年～1615年までの1万3632件に達し，1259年までの現代語訳が完了した．平成24年度も前年度に引き続き南海トラフで発生した歴史地震津波を対象として，1707年宝永地震，1854年安政地震後の記述を収集した．その内容は次のとおりである．

- [1] 1707年宝永地震については，三重，愛媛，奈良，大阪，和歌山における，津波被害とその後の対応，復興に関連する記事やデータが各地の郷土資料などから収集された．
- [2] 1854年安政地震については，三重，岐阜，静岡，における，発災から3年分の資料が，同様に郷土資料等から集められた．

（論文受理日：2013年7月5日）